

座談会

# シリアに笑顔を一スポーツとともに生きる

スポーツには、笑顔や仲間意識を生み、フェアプレーの精神から規範や公平性を重んじる心を育てる力がある。近年、大きく揺れるシリアは、これまで体育・スポーツ分野の青年海外協力隊が最も多く活動してきた国だ。隊員OB・OGが、今の思いを語った。



**シ**リアでは、どんな活動をしていたのですか？

**向井** 1984年1月から2年間、陸上競技連盟に配属され、首都ダマスカスで陸上競技を教えていました。87年に地中海沿岸諸国の国際大会が予定されていたので、それに向けて、400mハードル走を中心に、20代の代表選手の強化を担当していました。

**三角** 私は、2010年からシリアにあるパレスチナ難民キャンプの小中学校で体育を教えていましたが、その翌年に「アラブの春」と呼ばれる民主化運動が起き、その影響で治安が悪化しました。やっと活動が軌道に乗り始めたころでしたが、やむを得ず11年4月にいったん帰国し、8月からはヨルダンのパレスチナ難民キャンプで体育を教えました。2年3カ月の任期を終えて帰国した後、短期ボランティアとして再びヨルダンのシリア難民キャンプでも活動しました。

**仮屋** 私は1998年から3年間、ホムスという地方都市の柔道協会に所属して、選手の強化と市民への柔道普及に取り組んでいました。ホムスの人たちは冗談が好きで、遠征に行くバスの中でも、選手たちは延々と小話を披露し合っては笑っていましたね。

**三角** シリアには陽気な人が多いですね。ダラアは方言が強いのですが、日本人の私が方言で話すのが面白いらしく、よく教えられました。ダマスカスで使うと、みんな笑ってくれて受けが良かったですよ。

**仮屋** 復興の準備が整ったときに、いつでも協力できる自分でありたいということも常に考えています。協力隊時代、現地の女子柔道のコーチが、練習後の道場でアラビア語を一から教えてくれました。それを笑いながら見ていた子どもたちが、私が教科書を学び終えたときに手作りの賞状をくれたりと、楽しい時間でした。私は今、公益財団法人講道館の国際部で働いていますが、彼らのおかげで、アラブの人々が来たときに、今もアラビア語で会話ができるんです。なんて大きなプレゼントをもらったのだらうと胸が熱くなります。

**向井** シリアの人々は温かいですね。私がまだアラビア語に慣れないころ、自宅に帰るときに行き先の違うバスに乗り、終点まで行ってしまったことがありました。不安で、とにかく運転手に家の住所を連呼すると、事情を察した彼はアパート前までバスで送ってくれました。そんな心優しい人々が今、危険にさらされていると思うと、腹立たしい気持ちになります。とにかく、早く安定を取り戻してほしいです。

**三角** 笑顔は生きる力になります。彼らに寄り添う中

**ス**ポーツを通してどんなことを伝えましたか？

**仮屋** 続けることです。シリアの人は、飽きっぽいところがありますからね。練習の前に道場を掃除するとか、地味なことをコツコツ続けるって大切だと思うんです。2年くらい前、内戦で国外に避難した教え子が、「先生が教えられたこと、覚えてるよ」とメールをくれました。無事で安心したし、うれしかったな。柔道って、何回投げられても立ち上がるのが大事なんです。その稽古で困難に立ち向かう力を養います。そうしたことも少しは伝えられたのかもしれない。

**向井** 私の場合は、まずは結果を残すことですね。あの選手は長距離・マラソンの素質はあったものの、指導者がいなかったんです。そこで、指導を担当したところ、シリアの国内記録を更新するまでに育った例がありました。アラビア語は苦手でしたが、それでも、指導中は拙い会話やボディランゲージで、気持ちは十分通じましたね。

**三角** シリアでは多くを伝えられませんが、ヨルダンのシリア難民キャンプで子どもたちに伝えたのは、「ルールを守ること」です。ずるをして勝つのではなく、みんなで協力して、正々堂々とプレーした先にスポーツの面白さがあるのだ、と。スポーツイベントで子どもたちが、「負けちゃったけど、ルールを守

ってそう実感してきました。困難なときこそ、楽しい時間が必要であり、スポーツの持つ力が発揮される場面があるのだと思います。子どもたちが生き生きと走り回り、その傍らで大人たちがのんびりとお茶を飲みながら笑顔で見守っている。そんな日常が一日も早く戻ることを心から願っています。

**今**のシリアの現状をどのように感じていますか？

**仮屋** 僕たちが活動していたころは、少なくともスポーツができるくらい社会は安定していました。まずは教え子たちに無事でいてほしい。また柔道をしたい、その気持ちが生きるモチベーションになっていければと願っています。

**三角** 私は内戦後にヨルダンに逃れてきたシリアの人たちを見てきました。彼らは持ち前の明るさを失くしてはいませんが、ふとした瞬間に、子どもたちが心に負った悲しみを伝えてきたり、母親が私のひざで涙を流したりすることがあり、葛藤の中で活動を続けていました。誰もが悲しい思いをしているのだと思います。運動会を開いたときに、「今日は、思い切り楽しんで子どもたちから、家族に、そしてキャンプ全体に笑顔が広がるね」と同僚が言葉を掛けてくれたの

が忘れられません。復興の準備が整ったときに、いつでも協力できる自分でありたいということも常に考えています。協力隊時代、現地の女子柔道のコーチが、練習後の道場でアラビア語を一から教えてくれました。それを笑いながら見ていた子どもたちが、私が教科書を学び終えたときに手作りの賞状をくれたりと、楽しい時間でした。私は今、公益財団法人講道館の国際部で働いていますが、彼らのおかげで、アラブの人々が来たときに、今もアラビア語で会話ができるんです。なんて大きなプレゼントをもらったのだらうと胸が熱くなります。

**向井** シリアの人々は温かいですね。私がまだアラビア語に慣れないころ、自宅に帰るときに行き先の違うバスに乗り、終点まで行ってしまったことがありました。不安で、とにかく運転手に家の住所を連呼すると、事情を察した彼はアパート前までバスで送ってくれました。そんな心優しい人々が今、危険にさらされていると思うと、腹立たしい気持ちになります。とにかく、早く安定を取り戻してほしいです。

**三角** 笑顔は生きる力になります。彼らに寄り添う中

## 世界で一番新しい国 「南スーダン」とスポーツ

2011年7月9日、スーダンから南スーダン共和国が分離・独立した。しかし、独立後も民族間の衝突が絶えず、13年12月から内戦が続いている。民族間の融和が急がれる中、平和な国づくりに役立つものとして南スーダン政府が期待を寄せるのがスポーツの力だ。

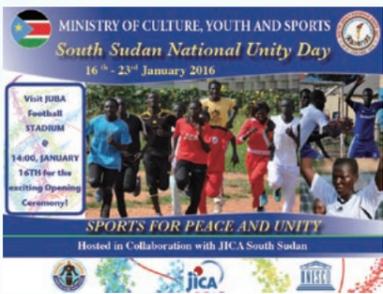
今年1月、南スーダンの首都ジュバで、独立後初の公式スポーツ大会となる「ナショナル・ユニティ・デー」が、1週間にわたって開催された。社会統合の象徴としてスポーツ大会を開催したいと考える同国政府が、JICAに支援を要請して実現したものだ。文化・青少年スポーツ省の指揮の下、南スーダンのオリンピック委員会の呼び掛けに、同国サッカー連盟と陸上連盟が協力。各州から集められた代表選手と中高生、それに関係者を合わせ、およそ400人が参加する大会となった。

南スーダンでは、内戦の影響で主要な幹線道路が利用できない区間もあり、地方部の人々が首都に足を運ぶことは簡単ではない。物理的な障壁に加え、ある州の中高生を指導するコーチは、「他の州に行くに命が狙われる」と言って、参加を断念した子どももいます」と、民族間の溝の現状を語った。

白熱したサッカーの試合では、リーグ戦の勝ち点が同じ場合、決勝トーナメントに進出するチームをどのように選出するか事前に通知されていなかったため、苦情や不満が噴出。急きよ、各チームのコーチが集められた。2時間に及ぶ話し合いの末、国際サッカー連盟(FIFA)のルールに準拠した選出方法を採用することで決着し、最終的には皆が納得するかたちで試合再開に至ったのだ。

スポーツを通じた平和構築の専門家として、この大会の開催に協力してきた大阪大学大学院人間科学研究科の岡田千あき准教授は、「スポーツには、民族融和を促し、平和を可視化する効果が期待されています。今回の大会では、関係者らがルールに従い、民主的な方法で問題の解決策を導き出していました。まるで、政治の場での平和構築のプロセスが再現されているようでした」と話す。

文化・青少年スポーツ省の幹部は、選手や中高生らに、「一人一人が大使として、大会での経験を各地に持ち帰ってほしい」と強く訴えた。



ナショナル・ユニティ・デーのポスター。大会の様子は、国の新聞にも大々的に取り上げられた



**仮屋力** ● かりやちから  
1998年7月～2001年7月、シリアの地方都市ホムスでナショナルチーム入りを目指す選手を中心に柔道を指導



**三角梢恵** ● みすみこずえ  
2010年9月から約5カ月間、シリア南西部ダラアのパレスチナ難民キャンプにて、小中学校で体育を指導。治安の悪化による本邦退避を経て、11年以降、ヨルダンのパレスチナ難民キャンプで活動した後、短期ボランティアとしてシリア難民キャンプで活動



**向井啓司** ● むかいけいじ  
1984年1月～86年1月、首都ダマスカスで国際大会出場を目指す選手に陸上競技を指導